

46.

今ペンを持ちながら暮れる年がせつなく感じられます。

バチカンで聖年の聖扉が閉ざされたのであります。年のあゆみがこのごろ足音を立てているようにも聞こえ、あるいは時計の秒針の刻みのようにも見えるのです。

芭蕉の有名な一句を紹介いたしましょう。

年暮れぬ笠きてわらじはきながら。

元禄の作者ですからわらじです。靴ではないのです。雲水か乞食かと一見される粗末な旅人姿です。笠を頭にかぶり足は遠い道を歩くためのわらじをまだ脱ぎもせず、つまり泊まるべき宿を得ていない道中で、年が暮れてしまったというのです。

この句は芭蕉の旅好きである境涯をそのまま表現しています。

私はこの句から更にわれわれの人生の有りようの暗喩を見つけて心の置き方を考えさせられると思ったのです。

47.

最近になって目につく語は「原点にかえれ」である。

各の方面においてしきりと原点にかえらなくてはならないと説かれる。ちょうど曲がり角に来た。このまま突進しては危険だということであろう。

物質的にあまりにも一辺倒だったので精神的なことが疎外された。原点へ戻ってやり直す時期が来たのだということで、もっともだと私は思う。

「初心忘れるべからず」と古人が芸に就くものを諭した。これも原点を忘れては大成しないとの警めである。

伝統を軽んじて陳腐と早合点すること、何でも新奇をねらって人を驚かして見せたいというのが現在の世相だったのである。

時代は常に変わりつつある。原点に帰ることは無理。しかし原点をよく考えることによって反省しながら中庸を得る道、そこに新しい世界をつくることは我々のやりがいのある仕事だと信じて間違いなしと思う。

48.

空いている畑のほとりに立てば草が萌え萌えそめる。あるべき場所には正直に露のとうが現れて春来るの喜びが湧いてきた。

俳句を作る楽しみは季節の挨拶があるからである。何かの形でいつも自然は季節を教えてくれ、その上更に人の感情を誘い出すことも忘れないのである。

俳句は人事を詠んでもよい。自由である。ただし季節を媒体として季節に溶け込んでいる人事を詠むれば間違いはない。

作家吉屋信子は俳句もたしなみにした小説家であるが、かつてこんなことを話した。

「滝の上に水現はれて落ちにけり 後藤夜半」は有名であるが、水を改めて「人」とすれば小説になるところですと指摘したそう。

俳句と小説との差というものを巧みに解いているのである。